

共同利用・共同研究課題「国境地域における日常的エスニシティ・宗教性：イラン・イラク・トルコのクルディスタンにおける比較事例研究」2025 年度第 1 回研究会（通算第 4 回目）
報告書

2025 年 7 月 18 日（金）日本時間 16:30 時より、共同利用・共同研究課題「国境地域における日常的エスニシティ・宗教性：イラン・イラク・トルコのクルディスタンにおける比較事例研究」2025 年度第 1 回研究会（通算第 4 回目）を開催した。研究会は、AA 研セミナー室（301）とオンライン（Zoom）でのハイブリット形式で、使用言語は英語で開催した。

参加者は、共同研究者では、松永泰行（東京外国語大学）、飯塚正人、後藤絵美（以上、AA 研）、Mostafa KHALILI（京都大学）、酒井啓子（千葉大学）、吉岡明子（日本エネルギー経済研究所）、貫井万里（文教学院大学）、Vakkas COLAK（東京外国語大学）、Sohrab AHMADIAN（東京外国語大学）、オブザーバーとして、Roschanack SHAERY-YAZDI（東京外国語大学）、Shima WAKED（東京外国語大学大学院）、Sofia HUERTA NUNES（東京外国語大学大学院）、李 儒理阿（東京外国語大学）、が参加した。

報告者と報告タイトルは以下の通り。

Yasuyuki Matsunaga, Sohrab Ahmadian, and Mostafa Khalili, "March 2025 Bashur Fieldwork Findings"

報告では、まず Matsunaga が、2025 年 3 月 15 日から 30 日まで、北イラク・クルディスタン自治区で行った参与観察および聞き取り調査を含むフィールド調査の概要と調査で得られた新たな知見について、投影資料に基づき提示を行った。調査の大枠としては、Khalid Shahrazuri がインドからもたらしたモジャッディディー派ナクシュバンディー教団らに代表される土着のイスラームの在り方と遠方（エジプト）から到来したイスラーム覚醒の潮流がいかに相互に影響を与えたか、およびそれを最もうまく捉える概念は何かを問とし、調査前の仮説と調査で得られた知見の齟齬とそれをどう説明に生かす予定であるかなどについて報告をした。さらにそれに、Khalili と Ahmadian が、調査の主要対象地域である Hawrami 地域の位置づけおよびクルディスタンにおける社会関係の在り様との関係などについて、追加の説明と独自の所見を付け加えた。

続いて、参加からコメントおよび質問を受け、比較の視座からの本調査の発見の位置づけやクルディスタンおよびイラクにおける部族の概念やそのプラクシスの理解などを巡って、活発な全体討議を行い、解散した。

（報告：松永泰行）